

第16回 「ことば」フォーラム

効果的なコミュニケーション
—間やリズムを上手に使おう—

2003年9月27日（土）

広島国際大学 国際教育センター 3階セミナー室

高倉 章男（広島国際大学）

小磯 花絵（国立国語研究所）

久次 弘子（広島国際大学）

広島国際大学の学生

江川 清（広島国際大学）

甲斐 睦朗（国立国語研究所）

後援：広島県教育委員会 広島市教育委員会 中国新聞社

共催：広島国際大学 言語・コミュニケーション学科

独立行政法人 国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

司会（杉戸） 好天に恵まれました。お暑期中、わざわざ御参加いただきましてありがとうございます。この「ことば」フォーラムという催しは、私ども東京にございます国立国語研究所が3年ほど前から1年間に5回、全国各地で開いてきているものです。本日は通算いたしまして16回目に当たります。本年度、更にあと3回予定しておりますが、「ことば」フォーラム、別の言い方をしますと、言葉について一緒に考えたり、あるいは話し合ったりする、いわば交流広場という意味の催しでございます。一般の市民の皆さん方、学校の先生方あるいは生徒さん、いろいろな方に参加していただいて、その都度、いろいろな言葉のテーマを選んで、そのテーマについて言葉をいろいろな角度から見つめ、そして話し合う、こういった企画です。申し遅れました。私、今日の司会進行役を務めさせていただきます国立国語研究所の杉戸清樹と申します。どうぞよろしく御協力いただきますよう、お願いいたします。それから、今日はすでに御覧のとおり、広島県手話通訳派遣委員会の方に手話通訳もお願いいたしております。さて、今日は、右のほうにも書いてございますように、あるいはお手元の資料にもございますように、御当地の黒瀬町にある広島国際大学、その中の言語・コミュニケーション学科と国立国語研究所とが共催で、この会を企画いたしております。さらに、広島県の教育委員会、それから、広島市の教育委員会、さらには中国新聞社からの御後援もいただいて開催することができております。ありがとうございます。今日の内容、テーマは、お手元の資料にもございますように、「効果的なコミュニケーションー間やりズムを上手に使おうー」。

「間」という字は「あいだ」と読まずに「ま」と読んでいただきますけれども、「間やりズムを上手に使おう」と題して開きました。4時半ぐらいまで講師のお話をお聞きいただいたり、あるいは後半になりますと国際大学の学生さんたちが前に出てきて、いろいろやってくださる予定も入っております。言葉について、今日のテーマに基づいて考えていただく時間を少しいただければと思います。では、はじめに共催の二つの機関を代表いたしまして、それぞれ御挨拶を申し上げます。はじめに独立行政法人国立国語研究所長甲斐睦朗から御挨拶申します。

甲斐 本日はこうやって国立国語研究所と広島国際大学言語・コミュニケーション学科の共催の「ことば」フォーラムにおいでいただきありがとうございます。私は国語研究所の所長の甲斐と申します。まず最初に国立国語研究所について少し申し上げますと、創立されましたのが昭和23年、1948年でありました。終戦後すぐに日本語についてのあり方を問題にする必要があるということで創立されたのでありますが、以来、56年目になっております。そして、3年前に独立行政法人というものに移行いたしました。私どもはこの四年間、「ことば」フォーラムというものに取り組んできておまして、現在16回目を数えているわけですが、それぞれの地域で、そこのある一つの団体と手を組んでというかたちで開催することも何回かあります。今回は幸いにも広島国際大学

の言語・コミュニケーション学科と共催することができて、こういう大変立派な建物をお借りすることができました。学科長の江川さんは私どものOBでありまして、後で挨拶いただくわけですが、まずその学科に対してお礼を申し上げます。それから、学科の先生方が今日は発表してくださり、また、学生もたくさんの方がお世話をさせていただいたことについて感謝申し上げます。それから、広島県教育委員会、広島市教育委員会、そして、中国新聞社には後援をいただいております。このことについても感謝申し上げます。私どもがこうやって「ことば」フォーラムを開催して、そして、たくさんの方においでいただくためには、地元の後援というものは大変必要なであります。なお、内容につきましては、ちょうど皆さんに差し上げております『国語研の窓』の最新号(第16号)には2回前の第14回の記録を載せてあります。1ページにまとめてありますけれども、お読みになると、どういう内容であるかということがお分かりいただけるだろうと思います。私も本日のこの「ことば」フォーラム「効果的なコミュニケーション」については、非常に分かりやすく、質がうんと高かろうというように内心期待しているところであります。どうぞ積極的に御参加いただいて、とりわけ「ことば」フォーラムのフォーラムというのは話し合いの広場という意味の外来語でありますので、会場の方と発表者がいろいろと話し合いができるとよいと思っているわけでありまして、それでは、これをもって挨拶といたします。どうもありがとうございました。

司会 続きまして、広島国際大学言語・コミュニケーション学科、学科長江川清から御挨拶申し上げます。

江川 今日はいい天気の中ということですが、こういう天気ときは普通はこういう場所に来るよりは、行楽にでかけるかと思いますが、よくいらっしやってくださいありがとうございます。先ほどから司会とか、国立国語研究所長のほうから、このフォーラム等に関する趣旨などについてはお話がありましたので、私のほうはそれは省略いたします。広島国際大学という名前の大学はまだなじみがない方もいらっしやるかと思えます。この大学は現在、大学ができてから6年目。卒業生はまだ2回しか出していない学校でございます。それで、黒瀬と呉市にキャンパスがございまして、現在、合わせて五つの学部が存在しております。来年4月からもう1学部増えて6学部というかたちになっているところです。今回の我々言語・コミュニケーション学科というのは、実は人間環境学部という学部の一つの学科でございます。この人間環境学部というのは、現在できてまだ3年目、つまり、卒業生は来年にならないと出ないというようなところです。逆にすごくフレッシュでありまして、学科としては、名前からありますように、コミュニケーションに関することをいろんな角度から勉強しているところです。コミュニケーションと言いましても、心理学の立場から、あるいは社会科学、社会学の立場から、英語、あるいは情報といったような広い観点からコミュニケーションについていろいろ勉強する。今日のテーマも、このコミュニケーション学科で勉強している部分の一部で

す。この学科では、今回もプログラムの最初の高倉のほうからお話がある理論的な部分、それから、後半の部分で久次と学生などが一緒にやります実践的な部分。つまり、この学科では理論と実践、それをバランスよく勉強しながら、社会に出たときにすぐに役に立つ、人の心の痛みが分かる、そういったかたちで学生が育っていくことを目指して、我々教員も一緒にやっているところです。それから、この会場、先ほど御紹介がありましたが、私どもの学生が随分大勢来て、皆様のお手伝いをしようとしております。スーツ姿の黒い……、それで、若いスタッフ、これが全部私どものスタッフです。それで、少し年寄りのスタッフは先ほどの国立国語研究所のスタッフです。(笑い) 学科の紹介に関してはパンフレットを入れておきましたので、御覧いただきたいと思いますが、この学科は、先ほど申しましたように、理論的な面をきっちり勉強し、かつ、楽しく実践をやっている学科ですので、皆様のお知り合いでこういうことを勉強したいという人がいましたら、ぜひお勧めください。この建物は実は私どもの学部ができたのと同じ年にできた建物で、これ自身も3年目ということでございます。今まではこの建物はあまり地域に開放せずに、ひっそりと運営がなされておりましたが、これからは少しいろんな人に使っていただく。つまり、建物の稼働率という問題がございまして、使っていただくというかたちに今動いております。我々もコミュニケーションに関してはいろんなことが勉強の対象になりますので、また機会がございましたら、この会場で今度は私どもの学科単独、あるいはまた別のところと共催で開かせていただきたいと思います。そのときはまた御案内申し上げますので、よろしく御参集ください。ありがとうございました。

司会 それでは、若くない部類に属します司会者から本日の内容について簡単に御案内いたします。もうここでお手元のプログラムの時間の大体15分というところまで、次の段階に入るところまで来ておりますが、本当に申しわけありませんが、ちょっと時間を取らせていただいて、7、8分、全体の御案内をさせていただきます。のちほど休憩時間などで調整いたしたいと思います。お手元のプログラムのとおりに、今日の進行は前半と後半に分けて進めます。間に休憩をはさみます。前半に二つの講演をお聞きいただきます。それぞれ30分ずつ予定しております。それぞれ質問が出てこようかと思いますが、御質問がある場合は、まず休憩時間の前まで、二つの講演が終わるまでお待ちいただいて、二人目の講演が終わった後、質問をお受けする時間を設けます。休憩の後、このテーマについて国際大学の学生さんたちにも協力していただいて、実際の使い方をこの前でやっていただくという時間を設けております。さて、今日のテーマについて少し内容的な御説明を申し上げます。「効果的なコミュニケーション-間やリズムを上手に使う」というわけですが、資料の最初のページに、細かな字で恐縮なんですけど、5行ほどの説明が書いてございます。コミュニケーションする場合、言葉を選ばなければいけない。とくに話したり聞いたりする場合に、まずは伝えようとする内容をうまく表す言葉を、ぴったりした言葉を選ぶことが必要です。例えば朝の挨拶であれば、「おはようご

ざいます」, お礼の言葉であれば, 「ありがとうございます」。ちょっと考えていただきたいんですが, これを文字に書いて, いわゆる棒読みにしてみたらどうなるか。「おはようございます」「ありがとうございます」。これは確かに言葉なんです, 文字に書いた言葉で, 全然気持ちがこもっていない。伝わってこない。ひと昔前の自動販売機がこんなしゃべり方をしていました。最近随分変わりました。それを例えば, 「おはようございます」「ありがとうございます」と。これは普段の一つの言い方だと思うんです。どうでしょうか。何が変わったんでしょうか。そうですね, 間とか, リズムとか, 声の出し方が変わっています。今日はそのことを考える「ことば」フォーラムです。声の使い方, 文字に書いただけでは伝わらない言葉の力, この点を考えていただこうと企画しております。資料には「パラ言語」と。恐らく初めて御覧になる方もおいでになるパラ言語という言葉が出てまいりました。言葉の, とくに音声の研究の領域, あるいは言葉の教育の領域の専門用語でございますが, そこにもありますように, 周辺言語とか, あるいは副言語というふうに言われたりもします。「パラ」というのは, もともとさかのぼればギリシャ語から来た言葉です。何か中心のもの, 何かそのものに寄り添って一緒にあるというようなときにパラ~という, そんな話を聞いたことがございます。オリンピックがありますが, オリンピックが終わるとパラオリンピックというのが開かれます。あの「パラ」です。同じ言葉からつくられていると聞きます。そのようなパラ言語という, 今日初めてお聞きいただく方は, ぜひこの機会に覚えていただいて, そのパラ言語という言葉をめぐる, いくつか準備いたしております。先ほど江川学科長の方からありましたけれども, 最初はパラ言語の理論編のお話。パラ言語って何だろうという話を聞いていただきます。二つ目に, 分析編といいたししょうか, パラ言語の使い方をどうやって調べるか, 研究するか, あるいは普段の暮らしの中でそのパラ言語をどう見つめるか, 聞き分けるか, そういった分析編のお話を準備しております。最後は実際編であります。ためしてみようコーナーとでも言いたししょうか, 学生の皆さんにこの場に出てきていただいて, 講師の久次先生の御指導のもと, 実際に会話をしてもらって, パラ言語を上手に使い分けるといえるのはどういうことなのか, それを一緒に考えていただこう。そんなふう準備しております。長くなりました。では, 最初の理論編というところから入ってまいります。「パラ言語の役割とは」と題しまして, 広島国際大学教授高倉章男先生にお話しいただきます。高倉先生は東京のお生まれで, 御専門はアイルランド・イギリスの文学, 小説の御研究, あるいはその翻訳などをなさっている先生であります。ちなみにお料理が随分, 食べるだけではなくて作るのがお好き, と。更に魚釣りも趣味だと聞いております。では, 高倉先生, よろしく願いいたします。

「パラ言語の役割とは？」高倉 章男

(配布資料 : p. 1 ~ 7)

高倉 こんにちは, 高倉です。パラ言語の理論編ということで, 今紹介にありました, こ

とに小説とかを専門にやっていて、言語学者ではありません。最初は高校生を対象にという話だったので気楽だったんですけども、話によると国語の専門家だったり、いろんな方がいるというので、少し緊張しています。今日はこれまで自分が関わった文学の作品の中から、言葉だとか、リズムだとか、言語の果たしている役割を、小説研究の立場から紹介していきたいと思います。まず、コミュニケーションの手段として、言語とか、その周辺言語、パラ言語とか、そういうふうな…?…ですけども、これからお話ししていく上で、ちょっと便宜的に二つに分けます。言語の役割、情報伝達というのと思伝達。分ける必要はない部分があるんですけども、例えば情報伝達であれば修飾もいらぬ。ただの事実を伝える。NHKの公共放送というような感じで思い浮かべていただければいいと思います。もう一つは意思伝達。自分の思想だとか、言いたいことを言葉で表現する。その手段としてパラ言語の修辞法だとか、言語自体持っているものですね。修飾的な語句を巧みに用いて表現する修辞法だとか、リズム、頭韻だとか、脚韻だとか、日本語で言うと七五調、五七調、それから、アクセント、テンポ、あと、文体。ただ、パラ言語の中では、言葉に適した動作、表情、話し言葉の声の調子、それから、強弱、音の抑制、それから、間、沈黙、いろんな言語周辺の働き、役割を持ったものがあります。それをうまく意識的に使えるようになる。または言葉あそびみたいなものを、英語と日本語を通して、できたものをちょっと意識的に変えていただければ、なにか役に立てればということで話をさせていただきたいと思います。意思伝達の方法としていろんな手法があるわけですけども、ぼくが担当するのは、言葉の持っている英語と日本語のリズムと間といったものが、言葉がないことによっていかに多くを物語るか。以心伝心なんていう言葉がありますけれども、その二つに限って話をしていきたいと思ひます。リズムと文体ということで、オスカー・ワイルドを例に、…?…あると思ひんですが、4ページぐらいに理論編のところに出ていると思ひます。一つだけ間違いがありまして、1行目、「私はあらゆることを表現できる」(『ドリアン・グレイの画像』オスカー・ワイルド(1854-1900)。そのあとに「作」がありますけれども、この作品ができたのは1891年の間違いです。申しわけありません。オスカー・ワイルドというのを簡単に説明させていただくと、19世紀末、日本では童話だとか、『幸福の王子』だとかで有名かも知れません。『ドリアン・グレイ』『サロメ』、劇作家、詩人、そういう作家です。この作品の細かい背景は今回省略させていただきますけれども、なにしろ「私はあらゆることを表現できる」と豪語した作家です。人間の持っている視覚、味覚、嗅覚、そういった五感を表現できる。それから、喜怒哀楽、すべての感情を言葉で表現できる。そういうふうな豪語した作家です。その中で凝縮されているところを3カ所選んで御紹介しようと思ひます。リズムだとか、頭韻、脚韻。下のほうに日本語が出ておりますので、一応英語を一つだけ読んで、Lの音だとか、そういうふうな頭韻、Pの音がどういうふうにつながっているか、音と日本語とを見比べていただければと思ひます。余り疲れる

ようだったら、1枚目で終わります。英語のほうにいけます。

The studio was filled with the rich odour of roses, and when the light summer wind stirred amidst the trees of the garden, there came through the open door the heavy scent of the lilac, or the more delicate perfume of the pink-flowering thorn.

From the corner of the divan of Persian saddle-bags on which he was lying, smoking, as was his custom, innumerable cigarettes, Lord Henry Wotton could just catch the gleam of the honey-sweet and honey-coloured blossoms of a laburnum, whose tremulous branches seemed hardly able to bear the burden of a beauty so flame-like as theirs; and now and then the fantastic shadows of birds in flight flitted across the long tussore-silk curtains that were stretched in front of the huge window, producing a kind of momentary Japanese effect, and making him think of those pallid jade-faced painters of Tokio who, through the medium of an art that is necessarily immobile, seek to convey the sense of swiftness and motion. The sullen murmur of the bees shouldering their way through the long unmown grass, or circling with monotonous insistence round the dusty gift horns of the straggling woodbine, seemed to make the stillness more oppressive. The dim roar of London was like the bourdon note of a distant organ.

こういう文です。この中で、日本語を見ても分かるんですけども、例えば嗅覚に訴えるものでいくと、薔薇の濃い香りだとか、ライラックの重い香りとか、あと、視覚に訴えているものでいうと、フラワーとか、金色だとか、ピンクとか、青ざめたとか、あと、聴覚でいうと、蜂のうなり声だとか、ロンドンのどよめきだとか、すべて意識的に言葉を通して嗅覚とか、色彩とか、視覚とか、聴覚、そういったものに訴えるような、人工的な文といえ人工的な文なんですけれども、その中で、お気づきの、例えば「honey-sweet」とか、ハイフンでつながっている音ですね。それだとか、音の繰り返し。「flame-like」とか、「flight flitted」「pallid jade」。頭の音を同じにして音楽的なものを表現しよう。そういうふうな意識的に作られたリズム、文体、それがここに凝縮されているのがこの文なんです。1番目の段落の句読点の数を数えてみると、一つの段落が一つの文でできています。第2段落には三つの文。ピリオドがなくて、句点が三つということですね。そのように流動的な、美的な雰囲気。香りだとか、そういったものをまさに乗っけて表現しようと、そういう意識的な意図が感じられるわけです。美的な雰囲気を冒頭から表現しようと。2番目のところは、躍動感だとか、幸福感だとか、美的な覚醒。ドリアン・グレイが自分の絵を見て、自分のナルシスト的な美に感動したという場面なんですけれども、ここで見てみると、ほとんど同じ語数の段落を出しているわけです。第1番目が212字、2番目のところが230字。ピリオドがどのぐらいあるかという、15。15の文があがっている。つまり、短く切れている。躍動感、幸福感。

なんか心臓の鼓動と連動しているようなピリオド。動きがあり、単調なものを繰り返していく。それがある。同じように情景描写の中の1行目を見ると、「passed listlessly in front of his picture」。Pの音が重なっている。1行目が「turned towards」。T, Tの音が重なっている。その後の行の「When he saw it he」。「he」という。「his cheeks flushed for」というFの音。5行目の「speaking」「catching」「meaning」というふうに、後ろの音が「ing」で揃っている。こういうふうに意識的に繰り返したとか、そういう言葉によって音、耳に訴える。聴覚的なリズムを表現しようとしているといえませんが。3枚目のページのところです。これは236語からできています。この第1段落が四つの文からできています。第2の段落が、これも四つの文からできています。3番目のところが六つの文からできている。ここでは精神的錯乱。ドリアン・グレイが殺人を犯してしまって、ちょっと精神的錯乱状態に陥っているところの描写なんですけど、単調になっている。もちろん…?…、冷たいという…?…しかない。読者に心の動きみたいなものを言葉とリズムによって表現しようとしているわけです。ここでも…?…韻を踏んでいるので、皆様方、時間があつたら、帰りにでも音を探してみてください。PだとかSの音が一緒になっている。こことここが同じになっている。それを日本語にうまくつなぎ合わせていくと、なんかおもしろい言葉あそびみたいなものができると思います。自分の研究として翻訳とかをやっているんですけども、意味を伝えることは可能なんですけれども、例えば、大変だったのはジェイン・オースティン。言葉で人をほめていたんですけども、よく考えるとけなしているんです。きれいだと言いながら、言葉の中に隠れて。そういうものを例えば英語から日本語にするときにごく苦勞するわけです。意味を伝えられる部分はあるんですけども、どうしても音が伝えられないということ。これが壁だと思うんです。だから、日本語では日本語のリズムを持っているわけですね。それが大事であつて、英語でも英語のリズムというものがある。そういったことで例に出しているのが次のページ。『マザー・グース』を例にとると。これは英国の童話みたいなかたちで、小学校に入る前に言葉を覚えたり、英語の活字にふれたりということで、有名なんですけれども、その中で「Peter Piper」。この早口言葉が有名なので、一つ例に取りました。例えば、ピーター・パイパーはピルクスを盗んだ。「a peck of」というのはたくさんという意味です。「pickled」、酢に漬けたピーマン。ピーター・パイパーはたくさん酢漬けのピーマンを盗んだ。こういう文なわけですけども、ただ、こういう文、例えば、盗んだであれば「stole」を用いたり、「robbed」だとか、そういう言葉が出てくるんですけども、Pの音を揃えるために、この早口言葉が頭に韻を踏んでいる。Pの音です。「Peter Piper picked a peck of pickled peppers」。耳に訴える。今度は倒置になって、目的語は「A Peck of pickled peppers Peter Piper picked」。そして、「if」の節。もし何々であつたなら。条件がつくんです。それで最後に疑問。このPの音、早口言葉を広島国際大学の授業で、これを10秒で言えたら10点

あげると言ったら、大体取られまして、ちょっとあげすぎだなと思ったんですけども、とても早口で1行2点何秒ぐらいで言えば、

「Peter Piper picked a peck of pickled peppers;

A Peck of pickled peppers Peter Piper picked.

If Peter Piper picked a peck of pickled peppers,

Where's the peck of pickled peppers Peter Piper picked ?」。

こういうふうなカタチで7秒ぐらいで学生たちにやられてしまったので、それ以後は得点をあげておりません。そういったことで、この「picked」。意味だけ伝えるんだったら「a lot of」を使ってもいいわけです。「picked」も「soured」とか。けれども、意識的にPの音のおもしろみを伝えるためにこの早口言葉、マザーグースのあれがあるんです。谷川俊太郎という詩人も同じような何か…?…「ことばあそびうた」の中で、これを取りあげて…?…があるんですけども、今度は日本語で、たとえば「ののはな」がテーマです。これをどこで切るかによって。例えば「の」が四つあるわけです。「はなののはのはな はなのななにあに なずななのはな なもないのばな」。「はなのの」。どこで切るかによって、また意味が…?…。「はなの」。漢字で書くと分かるかな。「花の野の野花」というとがあるだろうか。「花野の野花」。その横が「まいまい」という。かたつむりのことですね。今度は「ま」の音が繰り返す。「まいまいは まいまうまい まいまいの うまいまい もうまうまい」。こういう言葉。例えばこの日本語を英語にしようと思っても、音が伝わらなくなってしまう。意味を伝えようと思っても。ですから、さっき話したとおり、言葉の持っている、日本語だったら日本語のリズムだとか、音だとか、そういったものは大事にしていきたい。英語の持っているものは英語の…?…。こういったものを大事にしたい。個人的に思っているのが、広島に来て、広島弁というのが、「ジャケエ」だとか、そういう音があって、「JAROは日本広告機構のことじゃ、じゃった」とか、そういう「ジャロウ」とか、「ジャケエ」とか、「ジャンケンするじゃけん」とか、そういうような繰り返しの音を楽しんで、例えば…?…歌とか、そういった言葉で遊んでみるなんていうのもいいと思うんです。個人的にローカルの番組では広島弁を使ってもらいたいですね。NHKでもやっていますね。全国放送じゃなくて。広島弁を話さないと入社できないとかね。訓練を受けて、試験を受けて通らないとだめだとか、何かそういうふうな。最後になりますけれども、間というものに大きな、いろんな幅の言葉の広がり、意味の広がり、解釈の広がりがあるというようなことで、映像でも、演劇でもこれは用いられている方法です。つまり、見ている人、聞いている人に、その間の中でいろんな解釈を読み取ってもらいたい。一つ気になっているコマーシャルが、皆さん方は御存じかどうか、大塚製薬の。これも言い方によって意味がいろんな解釈に使えます。学生に聞いたところ、女性同士で旅行に行くから、旦那さんはほっときなさいよ。こういうような解釈があったんですけども、ぼくみたいにひねくれた人間は二つ…?

…。A, B, Cの, 20代後半から, 結婚後, 倦怠期になって, 例えば女性の方からいうと, 結婚前は, 「得意な料理は何」「肉じゃが」とか何とか言いながら旦那をだましたけれども, 結局, 料理はインスタントきりできないとか, そういうふうな解釈と, 反対に, 旦那がもう, あんな人と別れちゃいなさいよというような, そんな意味があるじゃないかという好対象があるわけです。小説研究もあんまり答えがない。いろんな解釈によって, 自分の受け取った感性で理解をする。そういうふうなところで, 一つ最後に, これを見て皆さん方がどのような印象を持たれるか, 教えていただければ幸いです。

<コマーシャルの音声>

皆さん方, どうでしょう。いろんな解釈が成り立つんじゃないかと思います。一応, 間ということで, 今度は専門的な立場から, 理論的な, 専門的な発表があると思います。以上, 簡単ですが, これで終わりたいと思います。

司会 高倉先生, どうもありがとうございました。最後のCM, いろんな解釈があるなど, 結婚して二十数年目の私などは考え込んでいるんですが。さて, 次の講演です。次は先ほど分析編と申しました。パラ言語とか, 時間の長さ, 声の調子, そういったものをどんなふうに見つめるか, 分析するか, そういった方向からの講義です。国立国語研究所の小磯花絵研究員です。小磯は東京出身でありまして, 話し言葉のいろいろな側面を研究しております。話し方や会話の仕組み, あいづちとか, うなずきとか, あるいはもっと細かい声の研究, 音声の研究などを進めているものです。「パラ言語を調べてみよう」と題してお話しいたします。

「パラ言語を調べてみよう」小磯 花絵 (配布資料 : p. 9 ~17)

小磯 国立国語研究所の小磯と申します。国立国語研究所のスタッフの平均年齢を下げていくというふうに自負しておりますけれども, 今日は皆様の御指導のもと, 発表させていただきたいと思っております。よろしくお願ひいたします。こちらのタイトルにもありますように, 私は今日は「パラ言語を調べてみよう」ということでお話をさせていただくわけですが, 私たちが普段しゃべっている話し言葉というものを見つめてみたときに, 例えば間であるとか, リズムであるとか, やっぱり皆さん大切だと思ながらも, じゃあ, それを具体的にどのぐらいの間なのか, そういうのを調べてみようと思うとなかなか大変だと思うんですね。そこら辺のことを実際の分析を皆さんと一緒に見ながら, どのように調べたらよいのかということ, 一緒に考えていきたいと思っております。高倉先生のお話に出てきた, 例えば間ですね。皆さん, 間が大切だということは, 例えば小学校の朗読のときとか, そういうときから随分言われてきたと思います。しかし, じゃあ, いざ私たちが普段しゃべっている, 例えば今私がしゃべっているこういう話し言葉でどういうところに間があるのか, あるいはどのぐらいの長さの間が。間といっても長さはいろいろあります。長い間もあれば短い間もある。そのときに, じゃあ, どの

ぐらいの長さなんだ。また、そういういろんな長さの間が置かれることによってどういう効果がコミュニケーションの中にあるのか。こういうことについて疑問に思ったとき、皆さんはどうやって調べたらいいんでしょう。例えば今ストップウォッチを片手に私の話をじっと聞いて、ここで間があった、ストップウォッチをカチカチというわけには当然いかないですよ。やってみてもいいですけども、間というのは非常に短くて、ストップウォッチで計れるようなものではありません。じゃあ、具体的にどうしたらいいのかということで、調べるということに関していろいろな方法がありますけれども、現在、特に中心的に行われている方法というのは、話し言葉の音声を収録して話し言葉のデータベースをつくって、それに基づいていろんな角度から調べる。そういった話し言葉のデータベースを使った研究、調べ方というのがかなり中心的に行われているわけです。今日は国立国語研究所で作成をしております話し言葉のデータベースを実際に使って、例えばポーズであるとか、声が高くなったり低くなったりとか、そういったことが私たちの実際しゃべっている日常の話し言葉の中で具体的にどんなものがあるかということ、実際に観測して、皆さんと一緒に見ていきたいと思っております。今申しましたように、国立国語研究所では話し言葉のデータベース、ここの中ではコーパスという名前でお呼びしておりますけれども、データベースと置き換えていただければよいと思います。ちょっとこちらの音をお聞きください。

<録音テープ視聴>

これは2年前のゴールデンウィークに11日間でネパールに旅行に行ったときの話です。エベレストを目指してと言うと、エベレストの登山をするんじゃないかというふうに思われる方がいらっしゃるかと思いますが、私は友人と2人で参加したネパールのヒマラヤトレッキングのお話をしてみたいと思います。

小磯 このように一般の人に研究所に来ていただきまして、自分の過去の経験、楽しかったこと、今回ですと旅行のお話であるとか、あるいは悲しかったこと、肉親の死であるとか、ペットの死であるとか、そういった自分の経験、あるいは自分の街の紹介、そういった話を一般の人にさせていただきます。10分間から15分ぐらいですね。こういった何百人ものデータを収録しています。あるいは今私がここでしゃべっているような講演の音声なんかも、こういう機会や学会の発表などに駆けつけて行って、しゃべっているところにマイクを、こういうハンドマイクではなくて、収録用のヘッドセットマイク、実況中継の人がよくスポーツとかでやっていると思いますが、そういうマイクをつけていただいて、地道に音声を収録しているわけです。このように音声を収録したら、では、分析ができるかと言いますと、そういうわけではありません。例えば音声を収録してから、どういう話の内容なのかということ、まず音声の文字化をいたします。そして、今度は単語に分けて品詞を付与するということです。こんなことを言う人は余りいない

と思うんですけど、例えば「国立国語研究所に行く」という発話が仮にあったといたしますと、「国立」と「国語」「研究」「所」「に」「行く」というふうに単語にまず分けま
す。そして、名詞であるとか、あるいは助詞、あるいは動詞といったように品詞を付与
します。また、「国立」「国語」「研究」「所」というふうに細かく切っていくのではなく、
全体として固有名詞であるというような、また、そういった多層的に単語に分けて、そ
して、品詞を付与する。このようにいたしますと、例えば検索するとき、このように
一回切っておけば、「立国」で間違っ
て検索されることはないということにもなりますし、
話し言葉の中でどんな単語がどのくらい使われているのかといった研究をすることがで
きるわけです。今回お話しするのはパラ言語ということですので、実はこういった音声
的な側面のラベリングをかなり細かく行っています。こちらの画面が研究用の情報を付
与している実際の画面です。もし小さいようでしたら、お手元の資料の方にも同じもの
がありますので、ちょっと印刷が悪いかもしれませんが、どちらかを参照していただけ
ればと思います。まず、こちらは、「1日に何回も」という発話になりますけれども、ち
ょっと強調して言いますと、「イ」のところで「イチンチニ」、「イ」から「チ」の
ところで声が高くなって、「イチンチニイ」と下がって、「ナンカイモ」でまた上がって下
がってというふうに、私たちは平坦にしゃべっているわけではなく、声の高さというの
が上下するわけですが、その声が高くなる、低くなるといった、この全体のイントネ
ーションを研究に利用できるように記号で登録しよう、と。例えばこれですと、「イチ
」の「イ」のところは低く始まりますから、ここにL。ロウという意味ですね。Lという、
低く始まって、「イチ」の「チ」のところで高くなる。この場合はH、ハイとなって、こ
こでいったん高くなります。そして、「イチンチ」の「チ」のところにアクセントがあり
ますから、これをA、アクセントのAですね。ここにアクセントがあり、そして、い
ったん「イチンチニ」と下がります。ここでもう1回Lというふう
に一端下がる。そして、「ナンカイモ」の「ナ」のところにもう1回アクセントがあり
ますから、ここにA、アクセントがあつて、「ナンカイ」で
どンドン下がっていきまして、ここが下がり切った
ところでAということですね。そして、「ナンカイモ」というふう
に、この場合は上がって下がる。HLと書いてありますが、上がってハイ・ロウ、上
がって下がるというスタイルの音の調子、上がって下がるという音調であることが
わかる。このようにラベリングの情報が付与されるということです。今回お話をし
ようと思っているものの一つに末尾の音調の部分があります。例えば「ナンカイモ」
というふう
に上昇する場合もあれば、「ナンカイモ」というふう
に下がる場合もあります。そして、ここにあるように「ナン
カイモ」というふう
に、今はかなり強調していますが、上がって下がる
といった音の調子、音調もあります。後で具体的なことをお示し
したいと思います。それからもう一つ、こちらのアクセントの位置も、これはお話し
しませんでした
が、その…?…立てたものをこのように視覚的に表示して
いますが、このアクセントの位置の声の高さというの

をどういふふうに出していくかということも、二つ目の特徴として言いたいと思います。それから、声の特徴としては、このような声の高さだけではありません。こちらの一番上にギザギザがありますけれども、これは音程波形といわれるもので、ここがギザギザのあるところが、実際に声がある部分です。大きく揺れている部分、ここなんかはかなり大きく話していますし、ここら辺は小さいということになるわけです。当然何も揺れてないところ、これが間、あるいはポーズ。私は今日の発表ではポーズという言葉を使わせていただきたいと思いますけれども、話していない部分、ポーズというのをこれで視覚的に見ることができる。ストップウォッチを使わなくても、このようにコンピュータに入れて、このようにちょっとした解析をすることで、どこが話していないのか、どのぐらいの長さなのかということを見ることができるようになります。もうちょっと細かいところもあるんですが、時間の関係で省略させていただきますが、このように細かいラベリングを行っておくことによって、先ほど言ったいろんな声の特徴というのを調べることができるわけです。いろんなことが調べられるんですが、いろんなことを山ほど言ってもあれですので、一つに絞ってお話をしたいと思います。これは何かと言いますと、話題の変化とパラ言語の関係。これは何かというと、たとえば皆さん、ある話をして、Aというお話から次の別の話題に移ろうとしたときに、間、ポーズを置かないで、タタターッと次の話にどンドンとんでいっちゃうようなしゃべり方をするのでしょうか。それとも、別の話に移るんだから、ちょっと間をあけて、ポーズを置いて、それから話し始めるのでしょうか。多分皆さんはポーズを置くんじゃないかな。じゃあ、具体的にどのぐらいの長さかなというところをちょっと見ていきたいと思うわけです。着目いたしますのは、今言いましたポーズ、それから、アクセント位置のピッチ、声の調子、音調。それぞれのところでまた説明をいたしますので、ちょっと先に行きます。話題とパラ言語との関係ということですから、まず話題というのを見ていくわけですがけれども、最初にお聞きいただいたヒマラヤに行ったお話。最初に音声のサンプルとして皆さんに御紹介したと思いますけれども、あれは初心者の方がヒマラヤに突然行ってトレッキングをするという思い切ったお話なんですけれども、その全体を見てみますと、最初にヒマラヤでどうして、初心者なのにいきなりなんでヒマラヤ、なんでトレッキングというお話をまずいたします。例えば、じゃあ、どういうメンバーと行ったのかということをお話としてお話をして、それから、トレッキングってなかなかなじみもありませんので、トレッキングツアーの1日のスケジュールって大体どんな感じなのかというようなお話をいたします。そして、いろんなお話をして、ヒマラヤに登ってどんなに感動したのかという話題に移って、最後に、ヒマラヤから帰ってきてから自分の生活がどう変わったのかということをお話しているわけです。大きく分けて、ちょっと途中をとばしましたが、15個ぐらいの話題がこのようにどンドン移り変わっていつているわけですが、こういった大きな話題の変化だけではなくて、例えば、トレッキングの1日のスケジュー

ールの中でいうと、いくつかの細かい、小さい話題の切れ目がございます。例えば朝食がどんな感じであったとか、準備がどんな感じだった、あるいは昼食がどうで、帰ってきてからお風呂がどうで、最後、夕食がどうで、寝るときはとても寒くてどうのこうのとか、そんな感じで1日のスケジュールの中でも朝昼晩と、例えばそういったいくつかの、この黄色いところよりは小さいけれども、やはりいくつか小さめの話題の変化があった。あるいは全く話題の変化のないところがあるということで、ここからの分析の中では、話題が大きく変わったところ、話題変化大ですね。それから、話題変化が今の朝昼晩みたいなかたちで、その中ではちょっと変わっているところ、話題変化中、そして、同じ話題が続いているところ、話題変化がなしと、この三つを対象に、例えばそれぞれポーズが、じゃあ、大のところと中のところとなしのところでどのぐらいポーズが違うのかとか、そういったことを先ほどのデータベースを活用して実際に分析をして、その結果を一緒に見ていきたいと思います。まず、こちらのポーズですけれども、このように話題変化があるうちの、例えば話題の変化が大きいときは、小さいときの切れ目と比べてポーズの長さは長いか、短いか、同じか。皆さんどう思いますか。これは質問をしなくても、多分皆さん、1番。2番。3番と答える人はまずいないと思うんですが、大きな話題の切れ目は長いんじゃないかと予想されると思うんです。じゃあ、ちょっと結果を見てみましょう。結果を見てみますと、話題変化がない場合、話題変化が中の場合、そして、話題変化が大の場合でポーズの長さは確かに長くなっています。そして、これはだんだん長くなる。つまり、ちょっとした切れ目のところよりも、大きな話題の変化のときには、我々は意識する人もいるし、意識しない人ももちろんいますが、ポーズの長さというものが実は変わっている。そのように同じ間をあけるといっても、ポーズの長さがいろいろ変化することによって、話題が移り変わっていく、その全体の流れというものを、メリハリをつけると言いますか、そういうことになっているのではないかと思います。そしてまた、こういったデータベースを使いますと、話題変化がないときは300ミリセック。ミリセックですから3分の1秒ぐらいですね。随分短いですね。短い、3分の1秒ぐらいの間がちょっとずつポンポンポンと入っていくのに対して、話題変化中のときは500ミリセック、0.5秒。そして、大きな話題変化があるときには1秒のポーズがある。これはもちろん平均ですから、それよりも長い場合もあれば、短い場合もあると思いますが、しかし、平均をこのように見ていきますと、ポーズがかなり話題変化の切れ目の強さと相関して、いろいろなバリエーションを持っているということがお分かりいただけるのではないかと思います。時間がありませんので、こちらの音声、下のほうだけちょっと聞いてみたいと思います。これは何かと言いますと、話題が継続している位置、つまり、話題変化がなしの場合ですから、普通、ポーズの平均が一番短かった0.3秒です。ですから、こちらは普通の音声ですね。ちょっと聞いてみてください。「まず、日本人のガイドが一人つきまして、あとは現地の水先案内人がつきます」。

どうですか。とくに不自然なところはないですね。これが普通の間です。じゃあ、それに対して話題が連続しているのに長い1秒の間、つまり、大きな話題変化があるときのポーズが入った場合はどうでしょうか。

「まず、日本人のガイドが一人つきまして、あとは現地の水先案内人がつきます」。全く同じ音声です。上をもう1回いきます。

「まず、日本人のガイドが一人つきまして、あとは現地の水先案内人がつきます」。これは普通ですね。長い間が入ると。

「まず、日本人のガイドが一人つきまして、あとは現地の水先案内人がつきます」。もちろん何か考え込んでいるのかなとか、なんか言うのをためらっているのかなとか言うふうに、ちょっと流れが途切れてしまったというふうに感じられるのではないのでしょうか。これが逆ですと、話題が転換しているのに、先に話をどんどん話していくなという印象。ちょっと聞く時間がありませんが、上のところを聞くとそういう印象になってしまうというわけです。それでは、今度はアクセント位置のピッチ。ピッチというのは声の高さです。声の高さと、それから、話題との関係に移りたいと思います。ちょっと音を聞いてみましょう。

「現地実際に人々が住んでいる、生活路を歩いて」。

ここの赤で書いてあるこの点がアクセントのある位置です。「ゲンチノジサイニヒトビト、ヒトビトガスンデイル、セイカツロヲアルイテ、アルイテ」。このようにここでは五カ所のアクセントがありますが、皆さん、なにかこの赤い点を見て気づくことはありませんか。こんな感じでアクセントを結ぶと、だんだん下降していることに……

(音声中断)

高倉 ……、たとえば人の前でとか、携帯電話でデッカイ声を出して話して、人の存在を考えない。それはやっぱり言葉が悪影響を与えているんだということも認識する必要があると思います。言葉の使い方、その場面だとか、流行とか。例えば10年間山口のほうにいたんですけども、第2番目の音が上がるんですね。宇部は「ウベ」が普通なんですけれど、「ウベ」というふうに2番目の語が上がるんです。例えば「ハギ」じゃなくて「ハギ」というふうに。ぼくは最初山口に来たときに、その言語はサーファー言語だと思ったんですね。湘南では語尾を上げるので。ああ、山口県はサーファー言語だと感動した覚えがあるんですが、そのように言葉が年代によって、流行語を使う高校生だけの言葉だとか、そういうのをある程度容認していくものも必要ではないかなと個人的に思っている。その言葉がまた文化になっていって、もちろんきれいな日本語というのはあるわけですけども、そういった新しく変わっていく要素はあるんじゃないかなと思います。ただ、このような問題とこのことは別だと思います。言葉が人を傷つけたり、そのようなこととはちょっと離して考えたらいんじゃないかと個人的には思っております。

小磯 時間がないので簡単に一言付け加えたいと思うんですが、確かに道德の問題というのがあります。人前でガーガーしゃべるといのは、ちょっとそれは置いておきまして、例えばこういうふうに入前で何かを伝える、それを正確に伝えるという場で望まれる話し方と、あるいは友達同士で話す場といのはやっぱり違うと思うんですね。もし友達同士でこんな、私が今しゃべっているようなしゃべり方をしたら、どんな友達関係なんだろうというふうにはたで聞いている人は思ってしまうと思うんです。そういうときは効果的に正確に情報を伝えるというのではなく、例えば楽しくおしゃべりをしたい。そのときは笑いながら、話題の切れ目がどうのこうのなんて、そんな感じではない、話の中に別のリズムが生まれると思うんです。また、こういうときに、今度はじゃあ、友達と話すようなしゃべり方をしてしまうと、またそれは場違いということになりますので、そういったあたりというのちょっと関係しているのかなというふうには思っております。簡単ですが、以上です。

司会 ありがとうございます。

<休憩>

司会 前半はお聞きのとおり、パラ言語そのものについて理論編、分析編と進んでまいりました。パラ言語という言葉が意味するもの、これは聞いたことがなかったんだけど、そういう声の出し方のことなのかと、お分かりいただけたかと思ます。さて、ここからはそのパラ言語についての、いわば実践編、試してみようパラ言語、上手にパラ言語を使いこなすには、そういった観点からのお話と、それから、のちほど御紹介いたします広島国際大学の学生の皆さんに、実際にこの前でパラ言語をつくっていただくという、そういう時間を準備いたしております。お話いただくのは広島国際大学助教授久次弘子先生でいらっしゃいます。久次先生は奈良県のお生まれで広島県のお育ちと聞いております。プレゼンテーション、人前での発表の技術とか、あるいはビジネスの場でのコミュニケーションなどについての実践的な教育とか研究をなさっています。それから、演じていただく学生さんも今ここで御紹介します。5人お願いしております。大峰君。どうぞ立って御挨拶を大峰君、それから、藤原君、中野さん、山田さん、西本さん、以上、5人の学生諸君が協力してくださいます。人前ですから、緊張なさるかもしれませんが、日ごろの訓練の成果をどうぞ御存分に見せてください。じゃあ、久次先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

「パラ言語で意図・心情をうまくつたえるために」久次 弘子

(配布資料：p. 19～24)

久次 久次でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。先ほどの御質問等を伺っております、この後どんな質問が来るんだろうと、もう怖くてこれ以上話せないような状況なんですけれども、日ごろ私が授業の中で、パフォーマンス論、セルフプレゼンテ

ーション実習，そして，ビジネスコミュニケーション実習という三つの必修の講座の中から，パラ言語の部分を取り上げて，今日は，教室でこんな感じでやっていますというところを御覧いただきたいと思っております。ビジネスコミュニケーション実習もセルフプレゼンテーション実習も後期 15 回ずつございますが，まだ数回しか実施しておりませんので，学生たちはレッスンが中途半端な状態でございます。でも，とてもいい子たちです。頑張ってくれる学生を連れてまいりました。今日は，私が実習の中でやっているレッスンを一部お見せするわけですが，このレッスンを受けている学生の中から本日お手伝いをしてくれる学生は，すべて原産地が広島でございます。ですから，彼らが話すアクセントは，共通語という感じではなく，広島弁混じりのものがございます。そこは御容赦いただいて，むしろ心情をそのまま表した場合には広島弁のアクセントになることは当然であろうと思えます。そのままのほうがまた相手に心情を伝えているとも思っております。そして，今日は，いま若い子たちが使っている，そのままの言葉ではなく，なるべく，ビジネスの現場などを想定して訓練しているところをお見せしようと思っておりますので，日常会話をチェックしたり，指導したりしているところではございません。その点をよろしくおくり取りいただければと思っております。それでは，先ほどの小磯先生からの御発表の中から言いますと，私が今から実施いたしますのはパラ言語情報伝達にかかわる特徴についての指導ということになるかと思えます。では，さっそく，どんなことをやっているのか，御覧いただきます。皆様が今の若い人たちの言葉でよく耳になさる，コンビニエンスストアなどでよく聞く「いらっしやいませ」とか，「ありがとうございます。またどうぞ」等の言葉について，まず，チェックをしてみましょう。その辺りでアルバイトをしている子がおりますので，普段どんなふうに言っているかを聞きまして，その言葉がイントネーション，つまり抑揚のつけ方で随分変わるということを御覧いただきます。言葉は人と人の心をつなぐ道具としてとらえております。その言葉が，人と人がコミュニケーションをとっているときの適切なイントネーションや間であるのかどうかということをおよそチェックしながらやっていきたいと思えます。じゃあ，西本さんと大峰君，来てください。じゃあ，二人はサービス業のアルバイトをしていると思いますが，西本さんはいつもお客様がドアからお見えになったときにどんなふうに言ってますか。

西本 いらっしやいませ，こんにちは。

久次 よく聞きますね。「いらっしやいませ，こんにちは。」そんな感じですね。じゃあ，「ありがとうございます。またどうぞ」とか言いますが，それはどんな感じで言っていますか。

西本 ありがとうございます。またどうぞ。

久次 どのコンビニとは聞きませんが，こういうマニュアル教育をなさっているコンビニが多いと思えます。大峰君，ちょっと，じゃあ，マイクを持って言ってくれますか。

大峰 いらっしゃいませ。

久次 その言い方だと、本当に良いお店ですね。でも私、一度あなたがアルバイトをしているお店へ行ったことがあります。そんな感じではなかったと思います。(笑)。もう一度やってみてください。

大峰 いらっしゃいませ(笑)。

久次 「らっしゃいませ」という感じですね。はい、「ありがとうございました」を言ってみてください。どうぞ。

大峰 ありやとございやした(笑)。

久次 確かに今のが正直なところです。それでは二人は、どんな気持ちで言っているか聞いてみましょう。西本さんは。

西本 マニュアルがあるので、そのとおりに。

久次 お客様を見てますか。

西本 あまりちゃんと見ていません。

大峰 ありがとございやした。(笑)。

久次 帰るときはどうですか。

大峰 ああ、帰るわ(笑)と。

久次 それだと、「ありやとございやした」になるわけですね。

お客様にちゃんと声を届けましょう、と私は教えます。相手との関係をつなぐというのが言葉ですので、胸から相手の胸にポーンと橋をかける、ブリッジをかけるように言ってみましょう。自分の胸から相手の胸に届くように言ってみましょう、とっております。では、そのような気持ちで言ってみてください。いらっしゃいませ。

西本 いらっしゃいませ。

久次 大峰君はどうですか。

大峰 いらっしゃいませ。

久次 そう。どのへんの人に言いました？

西本 このへんに。

久次 2mくらい先のほうに向かって。そうですか？では、もう一度言ってみましょうか。

西本 いらっしゃいませ。

久次 届きました？声が。私の位置までは届いてないのですが。さあ、届けるように、胸から胸へブリッジをかけたアクセントで、「いらっしゃいませ、いらっしゃいませ」というふうに、ふーっと言葉がたいこ橋を渡って届いたように聞こえるように。私は実は大学は演劇学の専攻だったのですが、そのときに届く声というレッスンをいたしました。自分の声を相手に届けるように、相手との空間がどれぐらいなのかというのを実感するために、授業ではボールを使ってやっております。そのボールをちょっと使ってみたいのですが、ここへ出してくれますか。では、西本さんはこちらで。大峰君は、あちら2

m先くらいまで行ってくれますか。はい、そこでいいですよ。それでは相手に、あそこにボールを投げながら、「いらっしやいませ」と言ってみましょう。

西本 いらっしやいませ。

久次 「いらっしやいませ」という言葉が終わる前に、ボールが相手に届きました。ちょうど「いらっしやいませ」の「せ」でストーンとあいての胸のところにボールを落としてみましようか。では、大峰君が逆に投げてみましよう。西本さんのところへ、お客様がちょうどドアから入ってきました。はい、「いらっしやいませ」。

大峰 いらっしやいませ。

久次 どうですか。ちょっと早かったようですよね。もう一度やってみましようか。ちょっと横になりましようか。いらっしやいませ。ちょうど胸にボールが届いたときは、自分に伝わったと思いましたでしょう。じゃあ、もう一度やってみましようか。

大峰 いらっしやいませ (笑)。

久次 もうちょっとスピードがいるということですよ。

大峰 はい。

久次 手と体と心をつつにするように意識しましよう。心は早くその人にいらっしやいませを届けたい。でも、言葉はふわっとゆっくり、少しずれてます。いらっしやいませ。こうですね。

大峰 いらっしやいませ (笑)。

久次 いらっしやいませ。

大峰 いらっしやいませ。

久次 かなり届いてきましたね。こういうふうにならう言葉と言葉の間ではなく、言葉自体の間ですね。言葉が持っている、言葉の中の、あるいは文章の中の間を、ちょうど相手の胸に届くように、ボールに言葉を乗せて。これが心だと思って、ボールに言葉を乗せて届けましよう、というふうにならう訓練してまいますと、だんだんその人の距離に合った声やスピードの出し方を体で学んでいくことにならいます。そこで、このボールをはずして、今の気持ちのままそこにいる人に「いらっしやいませ」と言いますと、聞こえた言葉、目と体と、実は表情まで一致してくるんですね。この距離の人に言うときの笑顔、そばにきたときの笑顔もちょっと違ってくるということも体験しまします。パラ言語はパラ言語だけ独立しているものではなく、すべて、身体も、体の使い方も、表情も、また、声の出し方も言葉の持つ意味と一致してまいます。それが一致してまいて初めて、届けられたほうは気持ちいいなと思うものだという体験をこういう授業でやっています。それでは、大峰君、最初の位置へ行ってくれますか。西本さんもどうぞ。「いらっしやいませ、こんにちは」という言葉について。「いらっしやいませ」と言いますね。届けてまいますか。次に、大峰君がドアから入ってきて、この人の前に来ましたね、注文しましようとしてまいます。そこにきたときに止まってみてください。ボールを持ったまま。それで渡しながら、

「こんにちは」。「いらっしゃいませ」という言葉と「こんにちは」という挨拶は違うときに使う言葉ですから、体も距離も声もスピードも皆違ってくると考えています。では、やってみましょう。

西本 いらっしゃいませ。

久次 ちょっと強かったようです。もう一度、胸から。ちょうど腰の辺りから前へ下手投げのように投げさせるのは、声をふわっと前に出す効果。上から投げ下ろすように出すと声は出しにくくなります。腰の辺りから前に向かい伸び上がるように出すと、大きな声も小さい声もコントロールできるんですね。「おーい」と遠くにいる人を呼ぶ場合によく分かります。腹式呼吸で出すということも同様のかたちに体になります。それはまた別の機会がございましたら。このようにポンと、胸から胸へという感じで投げっていきます。

西本 いらっしゃいませ。

久次 うまくなりましたね。次に、二人の距離が近づきました。はい。

西本 こんにちは。

久次 やっぱりアルバイトのくせができましたね。(笑)。「こんにちは」はすぐここですから。

西本 こんにちは。

久次 そうですね。そうすると、西本さん、お客さんが来ました。「いらっしゃいませ」。前に来ました。「こんにちは」になりますね。はい、では、やってみましょう。

西本 いらっしゃいませ。こんにちは。

久次 このようにできれば気持ちいいですね。こんなふうコンビニの方も教えていただくと、学生ももっと上手な対応ができると思うのですが。私もそうやって距離感を保ちながら、目の前に来たときになっこり笑って、一瞬「こんにちは」と言えるように、全く違う言葉を、さっきのように間を取らないで一緒にやってしまうことをまずは改めさせようと思っております。では、大峰君のほうは、「ありがとうございました。またどうぞ」ですね。ああ、やっと帰ったと思わないでね(笑)。「またどうぞ。ありがとうございました」じゃなく、お客様は2m先くらいのところにいらっしゃるとして、「ありがとうございました」と言いますね。ドアを閉める寸前、くるっとひっくり返ってこちらを御覧になったとします。になっこり笑って「またどうぞ」という心で。ボールを投げていると思って言ってみましょう。

大峰 ありがとうございました。またどうぞ。

久次 うーん、「またどうぞ」。もう一度お客さんは来るでしょうか。今の「またどうぞ」で。先ほどピッチを習ったと思いますが、「またどうぞ」でしたね。「またどうぞ」。ブリッジですね。はい、ではもう一度どうぞ。

大峰 ありがとうございました。

久次 「ありがとうございました」でしたよ。ボールを投げますよ。ありがとうございました

した。はい。

大峰 ありがとうございます。またどうぞ。

久次 そう。それだったら、ボールがいまポン、ポンと相手の心にブリッジをかけたように聞こえたと思います。ですから、相手の心にブリッジをかけるんだと想像してやりましょう。というふうに、60人ぐらいおりますので、180分ぐらい、挨拶だけで実習の時間を割いてしまうという授業になりますが、ここのところが大事だと思ってやっております。言葉と心を一致させる、体と表情とイントネーションを一致させるということは何度も言いますが、そういうところから始めましょうと指導しております。では、ビジネスコミュニケーションの実習に入りたいと思います。ビジネスコミュニケーションではビジネスの現場で、伝達ゲームとか、報告ゲームとか、ゲーム形式でやったりするのですが、今日はその一部分で伝達ゲーム。上司に報告をしたり、上司から指示されたことをメモして、こうでございますねと復唱させたりします。次に、復唱してメモをした学生が上司になって、次の人に指示命令をするというような伝達ゲームをしていきますと、パラ言語がきちんとしている子、立てるところは立て、間をきちんとして、大事なところの前は間をあけてやってる子はうまく伝わっていくのですが、そうでない子は伝わっていきません。今日は伝達ゲームをすることができませんので、そのときパラ言語を使うというところの指導までを一つずつやっていきたいと思いますので、御覧ください。では、上司役の学生、座りましょう。ビジネスの現場における上司の指示の復唱です。途中から上司の対応が変化します。今までの発表にもございましたが、私のレジュメにも書いております。このパラ言語の使い方によって双方に影響を与えますので、パラ言語が違ってくると相手の物言いも変わってくる、言葉の使い方が変わってくるといふところがあります。今日は言葉の使い方について言及することは避けたいと思いますが、パラ言語が違ってくると対応が違ってくるということちょっと思いただきたいと思います。じゃあ、中野さんが上司に呼ばれました。実は上司はいま大変忙しくしています。書類を書いた後に、このコピーを10部してほしいと言っています。それに対して中野さんがどのような態度をしたか、物言いをしたか、パラ言語を使ったかによって、実は最後の上司の言葉が言えなくなってしまう場合もあります。一応この上司はこのようなことを言うようなパラ言語でやってみたいと思います。はい。

男性 中野君、ちょっといいかね。

中野 はい、お呼びでしょうかあ。

男性 この資料を10部コピーしてくれるかね。

中野 はい、10部ですね。承知いたしました。

男性 おーい、急いでくれよ。午後の会議にいるんだからね。分かっているのかね。

久次 中野さん、今どんな感じで、どんな気持ちで言いました？

中野 いつも私ばかり（笑）。うるさいとか…？…。

久次 じゃあ、上司は今どんな感じがしました？ 今の応対。

男性 いや、気の長い部下を持って、ダメなやつ（笑）。

久次 自分はそんなふうにならないようにしてください。はい、そういう感じだったそうです。では、今度は余りめんどくさそうにしないで、上司が忙しそうにしている、まあ協力してやってもいいじゃないかと思って、思い直していただけますか。じゃあ、同じ場面として、ちょっと思い直してあげて、まあ、ちょっと手伝ってやろうか、いい男だしとか思いながらやってみてください。はい、じゃあ。

男性 中野君、ちょっといいかね。

中野 はい、お呼びでしょうか。

男性 この資料を10部コピーしてくれるかね。

中野 はい、10部ですね。承知いたしました。

久次 こういう応対だと、今度は言わなくてよくて安心した？

男性 そうですね。

久次 マジ、忘れたんでしょう、今。

男性 はい（笑）。

久次 マジ、何とかって学生たちは言いますけれども、あ、これで安心したと本当は思ったのですかね。

男性 そうですね。

久次 ということで、「あっ、これでいいな」と彼は思ってしまっ、「急いでくれよ、本当は分かっているのかね」という気持ちにならないような言い方だったということになります。せっかくいい気持ちになったところですから、言葉には言及しませんと申しましたけれども、今のようなリズムで相手の気持ちがわかって、忙しそうだな、手伝ってやろうかと思ったら、もう一つ、このような気の効いた言葉を言えればいいな、というサンプルとしてやってみましょう。先ほどの気持ちでやってもらいたいんですけども、そのときに一つだけ。先ほどはもうちょっと残念だったのは、「はい、10部ですね」と確認していただきかけたのですね。固有名詞であるとか、数字であるとかを、パラ言語でいうと、きちんと立てて、プロミネンスを使って、相手が安心するように、「あっ、10部だって分かってくれてるな」と安心するように立てて言いましょ。注意をします。では、もう一度、どうぞ。

男性 中野君、ちょっといいかね。

中野 はい、お呼びでしょうか。

男性 この資料を10部コピーしてくれるかね。

中野 はい、10部ですね。承知いたしました。

久次 「はい、10部ですねっ」と、もう少しプロミネンスを使って。

中野 はい、10部ですねっ。承知いたしました。課長、お急ぎのようですが、何時までに

いたしましょうか。

男性 そうだなあ、午後の会議にいるので、それまででいいよ。

久次 いかがでしたでしょうか。これならいいですか。それでは、このままでちょっと最初の気持ちでやってみましょう。「また呼んだよ、この人、また私かよ」という感じでやってみましょうか。はい。

男性 中野君、ちょっといいかね。

中野 はい、お呼びでしょうか。

男性 この資料を10部コピーしてくれるかね。

中野 はい、10部ですね。承知いたしました。課長、お急ぎのようですが、何時までにいたしましょうか。

男性 そうだな、午後の会議にいるけん、それまででいいよ。

久次 はい。「そうだな、午後の会議にいるけん、それまででいい」と広島弁が思わず出てきましたが、「午後の会議にいるんじゃけん、それまでにせいや」という感じに、こちらもだんだん、イライラして、やさしく言ってもらえなくなるという、そういう感じの対応になるんですね。この二つを少し極端にやってみましたが、パラ言語の違いでどちらが感じがいいかということは分かってくると思います。では、感じの良いパラ言語で仕上げをしてみてください。体の表現、それから、表情、相手との間合いも見ていただけませんかと思います。どうぞ。

男性 中野君、ちょっといいかね。

中野 はい、お呼びでしょうか。

男性 この資料を10部コピーしてくれるかね。

中野 はい、10部ですね。承知いたしました。課長、お急ぎのようですが、何時までにいたしましょうか。

男性 そうだな、午後の会議にいるので、それまででいいよ。

中野 14時からの会議の資料でしょうか。出来上がりましたら、時間に合わせて第2会議室までお持ちいたしておきましょうか。30分前には会議室のエアコンもおつけしておいたほうがよろしいですね。

男性 ありがとう、そうしておいてくれるかね。

久次 はい。「第2会議室」とか、「14時」とか、ちょっと強調しすぎましたが、でも、それぐらい忙しそうにしている上司に何か手伝おうかと思えば、こういう言葉も入ってきたり、顔も見ないで仕事をしている場合には、こういう名詞とか数字をきちんと立てて、ゆっくり間をあけて言うと、先ほどの話題が変わるときの前の間、ピッチなどにも気をつけると、相手が作業をしても何を言っているか分かるという状況になると思います。それで、最後には「ありがとう、そうしておいてくれるかな」。ああ、なんて気の効いた子だ、ボーナス上げようとか、いろいろあるかもしれません。そんな感じに

なるということで、最初の場面は少々時間をかけてやりましたので、後の場面は少し、それこそピッチを上げてやってみたいと思います。中野さん、ありがとう。次はビジネス場面における来客の応対なんですけれども、大峰君が仕事をしています。仕事をしているときに、来客というのはアポイントメントのないお客様、しかもいつもお会いするお客様なわけですね。その方がちょっと深刻な状況でやってきています。相手のパラ言語を把握して、自分がそれに合わせられるかという場面です。もう皆様お気づきのように、場面1は、最後にお客さんがムッとする状況になりますので、大峰君がとっても上手に対応してくれると思います。やってみましょう。

藤原 江川部長はいらっしゃいますか。

大峰 あいにく、ただいま会議中でございますので、お取り次ぎいたしかねます。4時ごろには終わる予定でございますが、どのような御用件でしょうか。

藤原 共同開発の新製品のことでちょっと変な話を聞いたんですけども、急いで相談がしたいので取り次いでほしい。

大峰 それでは、4時に終了いたしましたら、至急御連絡いたすよう申し伝えます。

藤原 ああ、じゃあ、とりあえず高倉課長でいいから、取り次いでください。

大峰 高倉でございますね。少々お待ちくださいませ。

久次 どんな感じがしました？ 大峰君の応対。

藤原 ちょっと大儀そうで、言葉に詰まりました。

久次 言葉に詰まったのはそっちが？悪い(笑)。今の場面は、二人がムカついてきますね、だんだん。こっちは急いでくれと言ってるんですが、向こうは急ぐのは、終わったら急いで連絡しますというような勘違いもあるようでして、深刻な状況ですね。こんなことは本当はその辺の社員には、ちょっと変な話を聞いたんだけど、内部のことでというようなことは余り言わないんですけれども、あえて言わせてみたわけですね。緊急度も。もうちょっと、藤原君、大変そうに芝居してくれる？ ちっとも大変そうでなかったもので、向こうものんびりしたのかもしれない。「じゃあ、高倉課長でもいいから」って怒られたら、じかにポーンと言葉を投げるのではなく、「じゃあ、高倉でございますね」という言い方でやってみましょうか。

藤原 江川部長はいらっしゃいますか。

大峰 あいにく、ただいま会議中でございます。4時ごろには終わる予定でございますが、いかがいたしましょうか。

藤原 共同開発の新製品の件でちょっと変な話を聞いたので、急いで相談したいことがある。取り次いでくれないか。

大峰 それでは、ちょっと様子を見てまいりますので、少々お待ちくださいませ。

藤原 じゃあ、お願いします。とりあえず、高倉課長がいらしたら、そちらにも取り次いでください。

大峰 はい、高倉ですね、かしこまりました。

久次 場面2の場合はマニュアルどおりの好青年というふうにやってもらったんですが、実はこんな大事な話を「いらっしゃいますでしょうか」と声をひそめて言ってるものに対して、「はい、何々でございますね」とやると、ちょっと調子違うんですよ。だから、大峰君、いいですか、第3場面をやっていきますので、これで、この人は急いでます、これは大変だなと思うから、自分もそのテンポ、間合いを合わせていくということになります。はい、やってみましょう。

藤原 江川部長はいらっしゃいますか。

大峰 あいにく、ただいま会議中でございます。4時ごろには終わる予定でございますが、いかがいたしましょうか。

藤原 共同開発の新製品の件でちょっと変な話を聞いたんだけど、急いで相談がしたいことがあるので取り次いでもらえないかな。

大峰 かしこまりました。それでは、少々、様子を見てまいりますので、少々お待ちくださいませ。あっ、藤原様、その件につきましては課長の高倉も担当と存じておりますが、高倉は在席しております。いかがいたしましょうか。

藤原 じゃあ、江川さんがだめなら、高倉さんでお願いします。

大峰 はい承知いたしました。少々お待ちくださいませ。

久次 相手とのスピード、声の感じも合わせて。これでコミュニケーションが成立するというふうに考えて指導しております。では、次の場面に入ります。上司の方、座っていただけますか。今度はビジネス現場における上司への報告です。上司が忙しそうに、もう顔も見ないで仕事をしています。しかし、部下は、どうしても報告しなければならないことがありますので、外出中の出来事などを報告するということで、山田のほうで報告にまいります。はい。

山田 部長、御報告したいことがございます。ただいまお時間よろしいでしょうか。

男性 いいよ。

山田 外出中にヒロコ株式会社のイトウ様よりお電話がございました。それから、オガワ様が業界功労賞を受賞されたそうです。先ほど常務が前期業績資料を取りにいらしゃったので、昨日作成した資料をお渡しいたしました。ちょっと説明をお聞きになりたいとおっしゃってました。

男性 ああ、そう。えっ、常務が。早くそれを言いなさい。

久次 三つ、ここでは要件があったと思うんですが、その三つの要件が同じように並行に聞こえてしまうと、忙しい上司は耳をそばだてて聞いてくれない。それを聞かせるように言わなければならない。抑揚、イントネーションをきちんとつけて、一つの話間に間を置いて、しかも大事なところはポイントを強調して、プロミネンスをつけて言うようにと指導しています。また、上司が仕事をしているときに邪魔になるほど大きな声でパ

ンパンとやってもおかしいですね。これでどのように声を使っていくかということも指導していきます。ちょっと時間が来ていますので、最後の場面3にいきます。では、もう確実に事柄の優先順位も分かって話すということにしたいと思いますので、場面3でいってみましょう。

山田 部長、御報告したいことがございます。ただいまお時間よろしいでしょうか。

男性 いいよ。

山田 先ほど常務が前期業績資料を取りにいらっしゃったので、昨日作成した資料と、先週新聞に掲載された我が社の関連記事とを一緒にお渡しいたしました。のちほど説明をお聞きになりたいとおっしゃってました。3時ごろヒロコ株式会社のイトウ様よりお電話がございました。5時ごろお電話をくださるそうです。それから、オガワ様が業界功労賞を受賞されたそうです。授賞式は9月27日とのことです。お祝いを贈られますか。

男性 うん、じゃあ、常務のところへ行ってきましたね。その間にイトウ様からお電話があったら、こちらからかけ直すと言ってといて。

山田 はい。

男性 それから、オガワさんのお祝いは何がよろしいかと、画商のヒライさんに連絡して、来週に来てもらうかな。

山田 はい、承知いたしました。それでは、ヒライさんには来週の御予定をお聞きしておきます。

久次 こういうふうに今三つのことをきちんと立てて、間を置いて言いましたので、上司も一つずつ答えていくということができないのではないかと考えております。これが一番いい見本だと思っております。それから、次に、今度はビジネスの現場で、お客様がいらっしゃって苦情を申し出てきました。それに対しての対応で、よく逆にお客様をうんと怒らせてしまったり、それから、納得して帰られたりということがあると思いますので、そののこのところをやっていただきたいと思うんですが、西本と大峰がやりますので。じゃあ、いいかな。

西本 すいません、これ10カ月前にこちらで買ったものなんですけど、故障したみたい。取り替えてもらえますか？

大峰 申しわけありません。はい。確かにうちの製品ですね。1年以内の保証ですから、もちろんお取り替えはいたしますけれども、どのようにお使いになったときにどのようなになりましたか。

西本 普通に、説明書に書いてあるようにしたんですけど。

大峰 普通にですか。じゃあ、お取り替えします。

西本 ちょっと待って。なんだか私の使い方が悪かったみたいなのに聞こえるんだけど、この会社、どういう会社なの。

久次 というふうになるんですけど、西本さんは普段はそういう言葉を使わないもんです

から。もうちょっと実は、今ごろの若い子のように。「先生やれば。すごい上手だから、先生やれ、この役は」って随分言われたんだけど、私はあんまりやりたくないんですが、「普通にい↑、説明書に書いてあるようにい↑、したんだけどお↑」って言うんですね。最近の学生は。そこで、「普通にですか」と言われたときに、「ちょっと待って。なんかア、私が悪いように聞こえるんだけど」。そういう感じにやっつてと言ったんですけど、彼女は普段お行儀のいい子ですので、そういうことがなかなかできない。こういうことを適切に、このまま言ってくれる子を連れてこようと思ったんですが、そういう子はこういうのに協力しない子だったものですから（笑）、失礼いたしました。それでちょっとお芝居してもらいました。今ですと両方感じが悪いんですね。両方、パラ言語の使い方も全く反対で、「普通にですか」…？…疑って聞こえる。だから、「ちょっと待って」という話になるわけですね。商品をスムーズに取り替えてもらいたいと思うのが、かえって、「この会社は大体どうなってるのか」とか、「これ、保証してもらいたい」という感じになってきますね。じゃあ、これでもうちょっと感じよく、西本さんは普段のお行儀のいい西本さんでいいし、大峰君もさわやかな大峰君で、やってみましょう。それで、「ちょっと待って」と言いたくなるかどうかなんですね。はい、やってみましょう。

西本 すみません、これ10カ月前にこちらで買ったものなんですけど、故障したみたい。取り替えてもらえますか。

大峰 申しわけありません。はい。確かにうちの製品ですね。1年以内の保証ですから、もちろんお取り替えはいたしますが、どのようにお使いになったときにどのような状態になりましたか。

西本 普通に、説明書に書いてあるようにしたんですけど。

大峰 普通にですか。じゃあ、お取り替えいたします。

久次 と言われたら、「ちょっと待って」と言われなくなるので、この場面1は最後の西本さんの言葉はもうなくなってしまいます。こういう対応ですと相手の気持ちにリズムも合ってますし、間合いも変な間合いを取って「ですかあ」というような言い方はしていませんので、とても感じよくなると思うんですね。では場面の3をやってみましょうかね。場面の3は最後になります。これは大峰君がとても上手にしてくれると思うんですけども、実はこれ、取り替えてほしいと思ったものは、私、落としちゃって困って、そのせいで故障になっちゃったかもしれないというところを、ビジネスコミュニケーション実習でやっております。こういう内容も、ちょっと今日のパラ言語のところから少しはずれるかもしれないんですけども、ビジネスでは苦情は宝だと言われております。苦情が来たときにこそ、その奥にある、自分のところの製品をもっと、改良すれば売れるんじゃないかということになりますので、情報がほしいわけですね。この情報、つまり、なぜ10カ月で壊れちゃったのかという情報を引き出すために苦情処理係というのは非常に難しい現場だとビジネス現場では言われております。そこで大峰君がどれだけ対応

ができるかなんですけれども、西本さんのほうが、「私、実は落としちゃったんだ」と言わせるようにちょっと訓練してきまして、ここは本音でございましたが、コツもございました。そういうことでやってみたいと思います。はい。

西本 すみません、これ 10 カ月前にこちらで買ったものなのですが、故障したみたい。取り替えてもらえますか。

大峰 申しわけありません。はい、確かにうちの製品ですね。1年以内の保証ですから、もちろんお取り替えはいたしますが、どのようにお使いになったときにどのような状態になりましたか。

西本 普通に、説明書に書いてあるようにしたんだけど。

大峰 さようでございますか。早速お取り替えいたします。お客様、申しわけございませんが、私どもの今後の製品開発の参考にもなると思いますので、念のためにいつもお使いになっているようになさっていただけますか。

西本 ああ、すいません。私、うっかりしてて1度だけ落としてしまったんです。取り替えてもらえますか。

大峰 御安心くださいませ。お取り替えいたします（笑）。

久次 いかがでした。取り替えるのは、安心して取り替えますので、どうして壊れたかという、その情報がほしいというやり方なんです。もちろんものの言い方はちょっと変えましたけれども、おおむね、うまくやったので、非常に物腰やわらかく、ついごめんなさいと言ってしまったみたいです。「ありがとうございます」という感じなんですけれども、こういう見本を見せまして、後の方が間合いの取り方とかを真似をしていくというようなことを授業の中でもやっております。パラ言語と少しはずれた部分もあったとは思いますが、大方こういう指導の仕方をして、パラ言語のことを注意しながらやっております。実習はこの辺にさせていただきたいと思います。

司会 どうぞ盛大な拍手をお願いいたします。改めて5人の学生さんたち、大峰君、藤原君、中野さん、山田さん、西本さん、見事な展開、ありがとうございました。さて、あと6分、7分ございます。質問、あるいは御意見をちょうだいできる時間です。いかがでしょうか。久次先生は今怖いとおっしゃっていました。もちろん怖い質問でもいいんですけれども、どうぞ。御感想でもいいです。いかがでしょうか。私なども学生時代、こういう授業を受けていたら、今日の司会などはもっとうまくできたのと思いつつ見していました。（笑）。私たちの時代と言ってはあれですが、こういう教育、教室はなかったと思います。今はこういう授業を受けられるんですね。いかがでしょうか。

久次 ちょっと…？…。

司会 どうぞ。

久次 パラ言語ということをかなり時間を使って指導をしておりますのは、実はビジネス界のアンケートを取りましたときに、近ごろの学生さんは就職面接をしたときに口がち

ちゃんと開いていない。日本語は「アイウエオ、アイウエオ」と口をきちんと開けると声はちゃんと出るはずだ。で、相手に意味も伝わるようなイントネーションも、声をきちんと出したらちゃんとつくはずだ。日本語がはっきり発音されている学生さんをあまり見ないということで、口をちゃんと開けて声を出せば表情が明るくなるはずだというふうにおっしゃったので、やってみました。「アイウオエ」ってみんなで言ったりするんですが、表情も非常によく動いてくるんですね。皆様もここで御覧になったと思うんですけども、「なんかあ」と言ってる人って「なんかあ」と口ごもってしまって、「ありがとうございました」と言うと、思わず表情も明るく、声も明るくという感じになります。口をまず開けることを教えたいと思ったんですね。それは先ほど御指摘もありました携帯電話のせいもあるかと思ってのんです。耳のそばで口をコチョコチョコと動かせば音が通じるというような御時世ですので、そういうこともあるかと思えます。もう一つは面接官との距離があります。ですから、届く声ということを最初にさせていただきましたが、面接官に聞こえる声を出さない学生が多いとのこと。その距離感がわからなくて、小さい声であるか、または、どういうふうに訓練されたのか分からないんですが、ドアの随分向こうに人がいるのかと思うような大きな声で「よろしく願い申し上げます」と面接を受ける子がいる。それは人と人とのコミュニケーションの道具である言葉を使う、この言葉を、パラ言語をどうやって使うかということ以前に、全然コミュニケーションをとる相手との間隔が分かっていない。人と人との間の距離が分からない学生が多い、という御指摘がありました。何をどうこうというよりも、まずは届く声で、口をきちんと開けて表情豊かに話してほしいという御意見でした。そこで、このところに力を入れようと決意してやっております。

司会 ほかに何か。それでは、久次先生、学生諸君の実習編をここまでとさせていただきます。ありがとうございました。おかげさまで順調に進んでまいりまして、今日の予定はすべて終了いたしました。パラ言語という言葉、新しく耳に入った方もおいでだと思いますけれども、声の使い方、そして、最後には、声の使い方だけではなく、言葉の選び方、さらには人と人との距離の取り方、表情、そういったことまでがコミュニケーションに大切だ。そういうお話として展開してまいりました。パラ言語という言葉をかぎにして、いろいろなおみやげをお持ち帰りいただけるとすれば、企画したものとして幸いに存じます。本当にありがとうございました。最後に、3人の講師の先生方、それから、楽しく見事な実習風景を見せてくださった学生諸君、そして、会場を手伝ってくださったたくさんの方々の学生の方、そして、手話通訳の方々、皆さんに改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。会場の皆さんにも司会者から改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。最後にもう一つ、繰り返してのお願いになりますが、お手元に黄色の紙にアンケート用紙を準備しております。丸をつけていただくだけの項目もあります。一番下の方には自由に御感想、御意見をお書きいただく部分もあり

ます。たくさんお書きいただければありがたいと思います。受付のところに箱がございますので、お渡しくださいますようお願いいたします。それでは、長い時間どうもありがとうございました。これでお開きといたします。お気をつけてお帰りください。お忘れ物のないようお願いいたします。

<終了>